



1 中学校の先生方へ ～平成31年度（令和元年度）全国学力・学習状況調査「英語」の結果から～

過日、平成31年度（令和元年度）全国学力・学習状況調査の結果が公表されました。今回から中学校第3学年で「英語」が追加されました。現在、各校では、結果分析をもとに、今後の授業改善の準備を進めている頃かと思えます。

今回の調査結果をどのように受け止め、子どもたちのために、よりよい授業を展開していけばよいのでしょうか。以下は、文部科学省による結果分析の一部です。福島県全体の概観については、過日通知した「平成31年度（令和元年度）授業改善グランドデザイン」のとおりです。各校の結果分析と比べて、いかがでしょうか。

●文部科学省による「教科に関する調査結果」から ※全国分析を抜粋、一部改

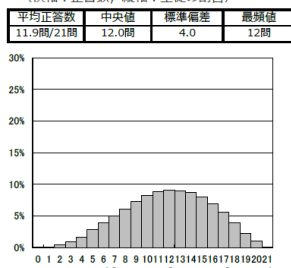
「聞くこと」、「読むこと」、「書くこと」について※太下線は義務教育課で追記

- ① 話されたり書かれたりしている内容を聞き取ったり、読み取ったりすることは、おおむねできていると考えられる。
- ② 理解した内容を踏まえ、目的・場面・状況に応じて、話し手や書き手の伝えたいことは何かを理解するなど、概要や要点を捉えることに課題がある。
- ③ 基本的な語や文法事項等の知識を活用することに課題があり、与えられたテーマについてまとまりのある文章を書くときにおいても、相手に伝わる英語で表現することができていないと考えられる。

〈分類・区分別集計結果〉

分類	区分	対象問題数(問)	平均正答率(%)
学習指導要領の領域	聞くこと	7	68.3
	話すこと(参考値)		
	読むこと	6	56.2
	書くこと	8	46.4
評価の観点	コミュニケーションへの関心・意欲・態度	0	
	外国語表現の能力	1	1.9
	外国語理解の能力	6	45.3
	言語や文化についての知識・理解	14	65.2
問題形式	選択式	13	71.9
	短答式	5	46.0
	記述式	3	7.3

〈中学校英語の生徒の正答数分布グラフ〉
(横軸：正答数、縦軸：生徒の割合)



「話すこと」について ※「聞くこと」「読むこと」「書くこと」の合計とは別に集計(参考値)

- ④ 話すことについては全体的に課題は多く、特に即興でやり取りすることに課題がある。
- ☆ 書くこと、話すことのどちらにおいても、問われていることが分かれば、自分の考えなどをなんとか伝えようとする粘り強さや意欲が見られる。

授業改善に向けて(今後3年を見通して) ※太下線は義務教育課で追記

- 新学習指導要領(平成30年度から移行期間開始)に示した取組を着実に実施する。
 - ・ 一文一文を聞き取る・読み取るだけでなく、目的・場面・状況等に応じて聞く・読む言語活動を充実させる。
 - ・ 文法事項等を言語活動の中で理解し定着させる(和文に対応した穴埋めや語順整序だけではなく)。
 - ・ 即興のやり取りをはじめとして、話すこと・書くことの発信の言語活動を充実させる。
- 生徒の英語学習の意欲を高める。
 - ・ 授業を実際のコミュニケーションの場面とする。
 - ・ 生徒の関心に応じた話題を取り上げる。
 - ・ 学習成果を適切に評価することで、学習意欲の向上を図る。など

国立教育政策研究所教育課程研究センター「授業アイデア例」

<http://www.nier.go.jp/kaihatsu/zenkokugakuryoku.html>

●押さえないポイント:新学習指導要領に則った授業改善!

●文部科学省による「質問紙調査結果」から※全国分析を抜粋、一部改

- ◆ 興味関心、授業の理解度に関する質問に肯定的に回答した生徒の方が、英語の平均正答率が高い傾向が見られる。とりわけ、「英語の勉強は好きか」「英語の授業はよく分かるか」と平均正答率の関係がある。
- ◆ 即興で自分の考えを英語で伝え合う言語活動や、聞いたり読んだりした内容について英語で書いてまとめたり自分の考えを書いたりする言語活動を行っている学校と行っていない学校では、「英語の勉強が好き」という生徒の割合に2倍以上の大きな差が出ている。
- ◆ 「聞くこと」「読むこと」「書くこと」「話すこと(やりとり)・(発表)」の領域別に見ると、すべての領域において、それぞれに関する言語活動を行っている学校の方が当該領域の平均正答率が高い傾向が見られ、学校における指導が影響していることが伺える。この傾向は、個別の設問の正答状況からも伺うことができ、各設問に関わりの深い言語活動について「行われていたと思う」と回答した生徒の方が正答の割合が高い傾向が見られた。
- ◆ 「聞いたり読んだりしたことについて、生徒同士で意見を述べ合ったりする」あるいは「その内容を英語で書いてまとめたり自分の考えを英語で書いたりする」という技能統合の言語活動についても、こうした言語活動を行っている学校の方が当該領域の平均正答率が高い傾向が見られた。
- ◆ 就学援助を受けている生徒の割合を考慮した三重クロス分析においても、就学援助を受けている生徒の割合が高い学校、低い学校どちらにおいても、聞いたり読んだりしたことについて、その内容を英語で書いたりする言語活動を行った学校の方が、英語の平均正答率が高い傾向が見られた。 ※太下線は義務教育課で追記

●押さえないポイント：「言語活動」の充実⇒資質・能力の育成！

2

小学校の先生方へ ～勇気をもって堂々と「授業」で「英語」を使おう！～

小学校においては、令和2年度からの新学習指導要領の全面実施に向けて、2年の移行期間をとおして、着実に新しい外国語教育が推進されていることと思います。

さて、各域内の研修会等で、「授業で英語を使いたい、恥ずかしくて自信がない」という声をよく耳にします。子どもたちが将来、笑顔で英語と関わりをもつことができるように、先生方が、是非、勇気をもって堂々と授業で英語を使ってほしいと思います。なぜなら、「日本人が英語を使う姿」を示すことに、大きな意義があるからです。

以下に、小学校の先生方にエールを送るために、最近の英語教育に関してよく耳にする考え方を整理します。

- (1) 小学校の英語の授業で主に必要なのは、中学校1～3年生の英語である。
- (2) 発音は日本語なまりであっても、かまわない。これからの時代で育成すべきは、どんな内容を発言するかであって、ネイティブのように発音することが全てではない。発音練習(慣れ親しみを含む)には、ICTの活用及びALT等との連携で対応することができる。
- (3) 先生方が間違えた英語を使っても、よほどの長期間、同じ間違いを繰り返して使い続けられない限り、その間違いが子どもたちに転移することはほとんどないので、懸念する必要はない。 など

一番大切なことは、小学校の先生方が、「日本人として英語を使う姿」を子どもたちに示すことではないでしょうか。

小学校の先生方が、例え少々英語を間違えたり、発音が日本語なまりであったりしても、勇気をもって、笑顔で、堂々と、「大切な何かを伝えるために、英語『で』挑戦する姿、そして、英語『に』挑戦する姿」こそが、生涯にわたって学び続ける最高の『自律的な英語学習者』のモデルになるのです。ふくしまの未来を切り拓く子どもたちに、そのような先生方の「勇姿」を示していただきたいと思います。